

カント哲学における“Kultur”概念の射程

田 中 綾 乃

要旨：本稿は、18世紀のドイツの哲学者イマヌエル・カント（1724-1804）が“Kultur”をどのように捉えていたのかを考察するものである。最近では、「文化芸術」や「文化立国」という言葉が聞かれるが、「文化」という概念はきわめて多義的であるように思われる。そもそも「文化」という言葉は、英語の culture やドイツ語の Kultur の訳語であり、本来のヨーロッパ語においても「耕作」という農耕用語から「精神や魂の養い」という意味まで範囲の広い概念として用いられているという背景がある。とはいえ、現代社会において我々が「文化」という言葉を用いる時、それは近代ヨーロッパの啓蒙時代に育まれ、近代哲学の中で論じられてきた「文化」の概念が踏まえられていると言えるだろう。

本稿では、カントの『判断力批判』のテキストを中心にしながら、“Kultur”概念を考察することで、「文化」という概念の射程を明らかにすることを試みる。

<はじめに>

近年、我が国において「文化芸術」ⁱや「文化立国」ⁱⁱという言葉をよく耳にするようになったが、「文化」という概念の内実はきわめて多義的である。「文化」という言葉は、culture や Kultur の訳語であるが、本来、ラテン語の cultura は、「耕作」や「培養」という農耕用語であった。だが、そこから人間生活や社会の中で「育て養う」という意味へと発展していく。これが人間生活の物理的な面での養いだけでなく、精神的な面、あるいは心の面での養いとして「心の洗練」や「陶冶」、「教養」などを意味するようになり、これらが「文化」と言われるのである。

この「文化」には、中村ⁱⁱⁱが指摘するように二つの意味が考えられる。一つ目には「開化」や「開発」という意味での「文化」であり、二つ目には「開化」や「開発」がなされ、文化された成果としての「文化」という意味である。今日、我々が日常的に使用するのとは、たとえば「アニメ文化」と言われるように、主に成果としての「文化」を意味している。だが、「精神文化」と言われるような場合では、単に結果としての「文化」だけではなく、そこには何か汲み尽くしえない人間の豊かな精神の働きによって生まれる「文化」が想定されているようにも思われる。

本稿では、18世紀のドイツの哲学者カントが“Kultur”^{iv}をどのように捉えていたのかを精査するが、カントの“Kultur”概念を考えることは、現代の我々が「文化」という言葉を用い、「文化」や「芸術」について考えを巡らす時に新たな示唆を与えてくれるものになるだろう。

1. 文化的存在としての人間

カントは『実用的見地における人間学』（1798）の冒頭で次のように述べている。

人間は文化（Kultur）を通して自分を教育していくものだが、文化が進歩する場合、そこにはいつでも、その進歩によって得られた知識や技術を応用して世界のために生かすという目標がある。（VII 119）

ここでは人間が「文化を通して自分を教育する」という文化的存在であること、そして、文化の進歩による知識や技術は、世界のために生かされるという目標が掲げられている。一般的に「文化の進歩」と言えば「文明」を想定するかもしれないが、カントにおいて「文化（Kultur）」と「文明（Zivilisation）」の概念は区別して使用されている。

人間は自分に備わった理性によって、一つの社会のうちで同じ人間たちとともに生活するように、そしてその社会のうちで技術と科学によって自分を開化し（kultivieren）、文明化し（zivilisieren）、道徳化する（moralisieren）ように規定されている。（VII 324 f.）

この開化（文化化）、文明化、道徳化という三段階については、それぞれ人間の技術的素質、実用的素質、道徳的素質に対応している（Vgl. VII 322 ff.）。そして、人間は「その本性より開化から出発して道徳性へと進むよう努める」（VII 327）存在として定義される。しかし、この道徳性を実現することはきわめて困難である。それは、次の『世界市民的見地における普遍史の理念』（1784）の記述からも明らかである。

我々は芸術や学問によって高度な文化をもち、種々の社会的礼節や上品さにおいて煩わしいほど文明化されている。しかし、我々がすでに道徳化されていると考えるためには、まだ非常に多くのものが欠けている。（VIII 26）

ここでは、人間が芸術や学問による「文化」を身につけ、さらに煩わしいほどに文明化されてはいるものの、道徳化においてはいまだ至っていないことが示されている。また、次の箇所からはカントが「文化」と「文明」を、道徳的理念を内包するかしらないかという点で対概念として捉えている³ことがわかる。

文化には、やはり道徳性の理念（Idee der Moralität）が属しているのに、この理念をもっぱら名誉心や外見的、上品さという疑似道徳に帰着するよう用いるならば、この理念の使い方はただ文明化ということしか意味しなくなる。（ibid.）

カントによれば、「文化」には道徳的理念が属しているが、他方で外面的で表面的な礼儀正しさや上品さという「文明化」においては、疑似道徳に過ぎないと言われるのである。こうしてカントが示す「文化」には、道徳性の理念が含まれることになるのだが、この道徳性と結びついた「文化」とは一体、どのようなものなのであろうか。そのことを主に『判断力批判』（1790）の議論を中心に辿っていこう。

2. カントの「共通感覚」論と「文化」

「文化」と道徳性との関係を考察するためにも、まずは「文化」と「芸術」の関係性についてカントがどのように考えていたのか見てみよう。前節で示したように、人間は「芸術や学問によって高度な文化」を持つと言われていた。カントは『判断力批判』の中で、快適なものは人間を開化することではなく、単に享受されるものだが、美しいものは「それが同時に快の感情における合目的性に注意することを教えることによって、人間を開化する」(V 266 f.) と述べている。そして、カントの『判断力批判』の前半部の「美学論」の最後にあたる 60 節では次のように言われる。

あらゆる美しい技術のための予備学 (Propädeutik) は、美しい技術の最高度の完全性が目指されている限り、諸指令のうちにあるのではなく、人文的教養 (humaniora) と呼ばれる予備知識による心の諸力の開化のうちにあるようにみえる。というのも、おそらく人間性 (Humanität) は、一方で普遍的な共感の感情 (Teilnehmungsgefühl) を意味し、他方では自分をもっとも誠実に、また普遍的に伝達する (mitteilen) ことができる能力を意味するからである。これらの特性は、ひとつに結びついて人間性 (Menschheit) にふさわしい社交性 (Geselligkeit) を作り上げ、この社交性によって人間性は動物的な卑屈さから区別されるのである。(V 355)

この箇所では美しい技術、すなわち芸術のための手ほどきは、人文的な教養の予備知識によって心の諸力が開化されることだと言われている。つまり、「芸術」の理解には、心の開化（文化化）の必要性が示されている。ここでの鍵は、「人間性 (Humanität)」^{vi} という概念であろう。というのも、人間形成としてのフマニテート (フマニタス) には、まさに精神的な教養である「文化」が不可欠だからである。

カントによれば「人間性 (Humanität)」とは、一方では普遍的な共感の感情であり、他方では自己伝達能力であることが示される。そして、この二つの特性が結びつくことで、「動物性」ではない「人間性 (Menschheit)」^{vii} としての社交性が築かれるのである。

この共感の感情と普遍的な伝達能力については、カントの「共通感覚 (sensus communis/ Gemeinssinn)」の論が踏まえられている。カントは「美学論」において、「趣味判断」の主観的原理として「共通感覚」^{viii} を示す。「共通感覚」は、主観的な感情ではあるが、単なる個人的なものではなく、我々に共通する感情として根底に置かれ、普遍的賛同を要求するものである。それゆえ、「共通感覚」は「我々の認識の普遍的伝達可能性の必然的条件として想定される」(V 239) のである。これらを踏まえて、『判断力批判』の 40 節では次のように示される。

共通感覚は、ある共通の感覚 (gemeinschaftlicher Sinn) の理念、すなわち次のような判定能力の理念と理解されなければならない。この判定能力は、自分の反省のうちで他のあらゆる人の表象の仕方を思考のうちで (ア・プリオリに) 顧慮するが、それはいわば総体的な人間理性と自分の判断とを照らし合わせるためであり、これによって容易に客観的とみなされかねない主観的な個人的諸条件に基づいて、判断に不利な影響を及ぼすかもしれない錯覚から免れるためである。(V 293)

カントはここで「共通感覚」とは、「ある共通の/共同体^{ix}の感覚」による判定の理念だと述べている。つまり「共通感覚」とはあくまで主観的な感情に基づくものだが、だからこそ「共通感覚」による個人的な判断が錯覚に陥らないためにも、自分の判断を総体的な人間理性と照らし合わせる反省的な判定が必要になる。カントによればこの反省作用は「他のあらゆる人の立場に自分を置き換えること」によって可能になるとし、この「他のあらゆる人の立場に立って考えること」を「判断力の格率」と呼ぶのである（V 294 f.）。

シュヴァルトレンダーは、「共通感覚」が共通的だといえる理由について「その中にはすべての他人の表象の仕方が顧慮されており、しかも他人の事実的な表現を経験的に顧みるだけではなく、「思考の中で」顧みている」^x 限りにおいてだと指摘している。人は何か美しいものや芸術作品に出会った時に、それに心動かされ、他の人も同じようにそれに心動かされているということ欲するだろう。しかし、「他のあらゆる人の立場に立つ」ということは、自分のそういう個人的な実質である感覚を捨象し、「自分の表象状態の形式的な諸特性に注意を払うことによって実現」（V 294）されるものなのである。それは「普遍的な立場に基づいて自身の判断を反省する」（ibid）ことであり、このような考えをカントは「拡張された考え方」（V 294）とも呼ぶが、これは自己の可能性を広げ、人間の思考の仕方に関係するという意味でも「文化」的なものである。

甲田は、カントの「共通感覚」を「理解の根源的地平にともなう共通性を地盤に、それを越えてそれ以上の普遍性へと自己を高めることを言わんとしている……それは「教養」と言われる精神の運動に他ならない」^{xi} と述べているが、何か美しいものに触れて、その美しい理由を「共通感覚」に求めながらも、心の諸力がさらに開化され、普遍性へと高まろうとする運動は、先に見たフマニタスとしての人間形成に繋がるものである。文化としての教養は「主観的な自己のこだわりから解放されることによって、制限づけとなる自己中心主義の克服であり、真に人間的な社会性を可能ならしめる」^{xii} ものである。

一方で、「共通感覚」は「概念を介さずに普遍的に伝達可能にするものの判定能力」（V 295）とも言われている。先の60節で見たように、これらの伝達可能な特性は「社交性」を作りあげが、カントは「社交性」について次のように述べている。

美しいものが経験的に関心をひくのは、ただ社会のうちだけである。また、社会への衝動が人間にとって自然であると容認され、だが社会に対する有能性と性癖、すなわち社交性が、社会形成のために規定された被造物としての人間の要件として、それゆえ人間性に属する特性として認容されるとすれば、趣味もまた、ひとが自分の感情すらも他のあらゆる人に伝達できるようすべてのものの判定能力として、したがって各人の自然的傾向性が要求するものを促進する手段としてみなされることは、間違いないであろう。（V 296 f.）

ここからも明らかなように、「社交性」とは「人間性（Menschheit）に属する特性」として考えられている。カントはこの箇所では無人島の例を出して、自分ひとりのためだけに花を飾ることはせず、洗練された人間でありたいと思うのは、複数の他者がいる社会のうちでのみだと述べている。つまり、「文化」は社会の中でこそ開化されるものなのである。そして、ある対象について他の人たちと共通の満足を感ずることが洗練された人間なのである。

カントは60節において、「民族は合法的な社会生活へと向かう旺盛な衝動によって、永続的

な共同体を作り上げる」(V 355)と述べている。だが、その共同体とは、時に戦争や植民地など、多くの困難をもたらすものでもある。しかし、その都度「教養ある階層の諸理念と比較的粗野な階層の諸理念とが相互に伝達しあう技術」を発見し、「前者の拡張や洗練を後者の自然な素朴さや独創性と調和」させてきた。この「高度な文化と自足的な自然との間を媒介する手段」が「共通感覚」としての趣味である。すなわち、それは共同体において「他のあらゆる人の立場に立って考えること」が求められるものである。そのような「心の洗練＝文化」が永続的な共同体において必要となるのである。

3. 「非社交的社交性」における「文化」

前節では、「社交性」が「人間性」の、そして「文化」のひとつの条件でありうることを見てきた。しかし、カントは『世界市民的見地における普遍史の理念』において「非社交的社交性 (ungesellige Geselligkeit)」というパラドキシカルな概念を用いて、「文化」が発展する可能性を論じている。その点を見てみよう。

自然のあらゆる素質の発展を実現するために自然が用いる手段は、社会における自然素質の敵対関係 (Antagonism) であり、＜中略＞ 私がここで理解する敵対関係というのは、人間の非社交的社交性のこと、すなわち人間が社会の中に入っていこうとする性癖であるが、同時にこれは社会を絶えず分断する恐れのある一般的抵抗と結びついている性癖のことでもある。(VIII 20)

カントは、人間について、一方では自らの自然素質を発展させるような「社会を形成しようとする傾向性」、すなわち社交性を持つが、他方で「ひとり (孤独) を好む」という非社交的な性質も持ち合わせていることを指摘する。時に他者への敵対関係を生じさせる非社交的な性質は「確かにそれ自身決して好ましい特性ではない」が、これを欠いて「協調、寡欲、相互愛のある牧歌的な羊飼いの生活を送るならば、才能はすべてその萌芽の状態でいつまでも隠されたまま」(VIII 21) であるとも述べられるのである。それゆえ、敵対関係や非社交的な性質が人類にとっては、あるすぐれた自然素質を発展させるし、自然は「人類にとって何が善であるかを知っているので、不和を欲する」(ibid.) ものだとも言われる。

たしかに非社交性や抵抗というのは、災禍が生まれる源ではあるが、自然は「新たに人間の力を引き締め、自然素質をさらに発展させるように駆り立てている」(ibid.) のである。カントは次のように述べる。

人間を飾るあらゆる文化と技術 (芸術)、および最もすぐれた社会的秩序は、すべて非社交性が実りを結んだものである。この非社交性は自己訓練を課し、その強制的な技 (Kunst) を通して自然の萌芽を完全に発展させるよう我と我が身に強いるのである。(VIII 22)

ここでは、文化や芸術の領域においては、非社交性という抵抗の性質が不可欠であることが示されている。というのも、その抵抗こそが「人間のあらゆる力を呼び覚ます」(VIII 21) から

である。カントによれば、このような「非社交的社交性」によって、人間は名誉欲や支配欲、所有欲に駆り立てられて、社会の中で地位を獲得するようになる。このことは同時に「粗野な状態（Rohigkeit）から抜け出て、人間の社会的価値を本質とする文化への第一歩が生じ、またこの時、あらゆる才能が少しずつ伸ばされ、趣味が形成され、絶えざる啓蒙（Aufklärung）によって思惟様式の構築が始まる」（VIII 21）とも言われるのである。

こうして「非社交的社交性」の中で、人間の社会的価値を本質とする文化（人間の開化）へのプロセスが示されるわけだが、これは『判断力批判』83 節にみられる「熟練の開化」へと繋がる。次節では、『判断力批判』の「目的論」で語られる“Kultur”の概念を確認しよう。

4. 「熟練の文化」と「訓練の文化」

83 節は「目的論的体系としての自然の最終目的について」と題された節であるが、カントはここで次のように述べている。

人間は悟性をもち、したがって自分自身で意のままに目的を措定する能力をもつ地上の唯一の存在者としては、自然の主人という称号が与えられており、自然が一つの目的論的体系とみられるとすれば、人間の使命からみて自然の最終目的である。（V 431）

上記では、自然を目的論的体系として見るならば、人間は「自然の最終目的」であると言われている。しかし、カントによれば、これはあくまで「条件つき」である。その条件とは、人間は自然諸目的の連鎖においてはひとつの項に過ぎないので、「人間の究極目的は自然のうちに決して求められてはならない」（ibid.）という条件である。それゆえ、カントは改めて人間を自然全体の究極目的としてたらしめるものは一体何であるのかと問い、それを「文化」に求める。つまり、自然の最終目的とは「人間性の陶冶としての文化」^{xiii}なのである。

ここでの「文化」とは、理性的存在者による「自然を人間の自由な諸目的一般の格率に適合して手段として使用する有能性（Tauglichkeit）」を生み出すものとして定義される。そして、カントはこの「文化」を二つに分けるが、それが「熟練の文化（Kultur der Geschicklichkeit）」と「訓練（規律）の文化（Kultur der Zucht oder Disziplin）」である。

「熟練の文化」は、まず「人類のうちでは人間間の不平等を媒介しなければ、発展できない」（V 432）文化であることが示される。そして、前節で見た「非社交的社交性」によって、「輝かしい悲惨（glänzende Elend）」がもたらされる可能性も示唆される。たとえば、もしも人間の名誉欲や権力欲、所有欲が妨げられる障害があれば、戦争が生じることもあるだろう。戦争は「人間の意図のない（奔放な激情によって刺激された）試みでありながら、それでも最上の知恵の深く隠された、おそらくは意図的な試み」（V 433）であるとされる。この点は『世界市民的見地における普遍史の理念』においても論じられていた^{xiv}。

カントによれば、戦争は「大きな苦難をもたらすにもかかわらず、それでも文化に役立つあらゆる才能を最高度に発展させる」（ibid.）ものである。その発展とは「市民社会（bürgerliche Gesellschaft）」と呼ばれる合法的な体制を形成することであり、この体制では互いに抗争する自由は制限されるが、「こうした体制のうちでのみ自然素質は最大の発展が可能」（V 432）だと言われる。そして、さらにこの「市民社会」の体制を持続するためには「世界市民的全体

(weltbürgerliches Ganze)」、すなわち、すべての国家の一体系が求められるのである。

しかし「熟練の文化」は、「諸目的一般を促進するための有能性のもっとも重要な主観的条件」(V 431)ではあるものの、「意志の諸目的を規定し選択する際に意志を促進するのには十分ではない」(V 432)ので、「自然の最終目的」において十分とは言えない文化である。意志の自由を促進するためには、「訓練の文化」による「欲求の専制から意志を解放すること」(ibid.)が必要となるのである。

「訓練の文化」とは、傾向性を排除するように自らを躰け、自らの理性を自由に使用するように訓練することである。とはいえ、夥しい傾向性によって人間性の発展は困難であるのだが、それでも訓練の意図とは「自然そのものが提供しうるよりもいっそう高次の諸目的を我々に受け入れさせるように育成するために、自然のある合目的な努力」(V 433)であることが示される。それは次のように言われる。

芸術と諸学問は、普遍的に伝達されうる快によって、また社会に対して彫琢し洗練することによって、たとえ人間を人倫的には改善しないとしても、教養ある(gesittet)ものにする。このような芸術と諸学問は、感性的性癖の圧政からきわめて多くのものを勝ち取り、このことによって理性だけが権力をもつべき支配権へと人間を準備する。(ibid.)

ここでは、カントが芸術や諸学問を傾向性を排除しようとする「訓練の文化」において有効なものとして位置づけていると考えることができる。つまり、芸術や諸学問は、いつの時代でも普遍的に伝達されうる快や社会に対する洗練を通し、人間を人倫的には改善しないものの、教養(文化的)あるものへと向かわせるのである。

この“gesittet”を“Sitte(人倫)”との関係で考えれば、「教養」の概念の中には最終的には人倫性も含まれる可能性があることが推察される。それというのも、先に見たように人間は「開化から出発して道徳性へと進むよう努める」存在であるからであり、それは単に個人的な人間の開化だけではなく、歴史的に捉えれば、人類の開化としても捉えられるのである。

さらに、上記の「理性だけが権力をもつべき支配権」とは、一言で言えば「理性のみが力をもつべき道徳の主権」^{xv}のことである。それゆえ、芸術と諸学問は、人間を、そして人類を教養あるものとして道徳性の理念を含んだ「文化」へと向かわせるのである。それは次のためである。

その間に、一部は自然が、一部は人間の頑迷な我欲が、我々にふりかかる過悪は、同時に心の諸力を奮起させ、高め鍛えて、この過悪に屈しないようにさせるのであり、こうして我々のうちに隠れているいっそう高次の諸目的に対する有能性を我々に感知させるのである。(V 433 f.)

我々のうちに隠れている高次の諸目的とは、「道徳的存在者の人間」(V 435)という究極目的のことである。「文化」は、その究極目的に対する有能性を我々に気づかせるものなのである。このことは同時に人間の生そのものに価値を与えるものとなるのである。

<おわりに>

本稿では、カントの“Kultur”概念を手がかりにしながら、「文化」の内実、およびその射程について考察を試みてきた。カントによれば、人間は学問や芸術によって、自らを開化し、「文化」を養いながら人間形成を行っていく存在である。そして、我々が芸術作品を鑑賞する時に働く「共通感覚」は、「他のあらゆる人の立場に自分を置き換えること」という反省であったが、この作用も「文化」的である。「文化」は、あらゆる人の立場を顧慮し、多様性を認めるものである。他方で、「文化」や「芸術」は「非社会的社交性」の下で発展するが、そこには人類の発展、そして「世界市民的全体」という視点で、「文化」が捉えられているのであった。

最後に『判断力批判』60節のテキストを見ることで、本稿を閉じることにしよう。

趣味は、根本的には人倫的諸理念の感性化の判定能力である。この判定能力から、そしてこの判定能力に基づくべき人倫的諸理念に由来する感情（道徳的感情）に対するいっそう大きな感受性から、次の快が導き出される。それは、趣味が人間性一般に対して妥当するのであって、単に各人の個人感情に対して妥当するのではない、と声明する快である。それであるから、趣味を基礎づけるための真の予備学とは、人倫的諸理念の発達と道徳的感情の開化であることは明らかである。（V 356）

先の2節でも見たように、カントは、「美しい技術のための予備学」では「人文的教養という心の諸力の開化」の重要性を説いていたが、ここでは、我々の道徳的感情を開化することが趣味を確立するための真の予備学となることが示されている。それというのも、趣味（美）が人倫的諸理念、すなわち、道徳的な様々な理念の感性化への判定能力であるからである。この点について、中村は次のようにまとめる。

趣味は、我々の心の開発、とりわけ道徳性の開発によってより真正なものとなり、より他者のことを考えるものとなるのである。心の開発が、即ち道徳の開発が趣味を深め、人間の相互尊重の感情を高め、深めるのである。まさにカント文化論の真髄はここにあると言えよう。カントの“Kultur”は、結果としての「文化」ではなく、「越感性的なもの」をその内部に原理として持つ人間存在が他者との関わりの中で美によって（美を目指して）不断に自らを開化し、開発していくことを意味するものなのである。そして、それによって他者も開発され（文化され）、また逆にこの他者によってこちら側も再び更に開発されていく。（中村、p.153-154）^{xvi}

先に「人間は文化的存在」と述べてきた。ここで改めて人間という存在の内実を考えてみると、それはカント的に言えば「超感性的なもの」、あるいは「叡智的・道徳的なもの」を内部に宿した人間を意味するのである。それゆえ、人間社会の中で「文化」を発展させていくためには、人間の道徳感情を開化していくことが必要であり、そのことによって我々の趣味は深められる。ここでの「文化」とは、国や民族や風習を越えた「世界市民（コスモポリタン）」の中での他者との相互的な関わりの中で開化されることを示唆する。ひとえにそれは道徳的理

念と結びついた「文化」が想定されているのである。

このようにカントが示した「文化」の内実が具体的にどういう事態を示すのか、また、現代の我々の文化状況の中でどのような意味を持つのかという点については、稿を改めて論じたい。

〈註〉

カントの著作からの引用ページ数は、アカデミー版による。また、翻訳については、『カント全集』（岩波書店）、『カント全集』（理想社）を適宜参考にした。

- i もともと「文化 (culture, Kultur)」と「芸術 (art, Kunst)」という言葉の意味はそれぞれ独立したものであるが、日本では「科学技術」という言葉同様に「文化芸術」と呼ばれる。
- ii 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に伴い、我が国では新しい「文化芸術立国」を目指して、文化庁が文化政策を強化している。
- iii 中村博雄『カント『判断力批判』の研究』、東海大学出版会、1995 年、p.152
- iv カントにおいても Kultur の概念は広義で、「文化」、「開化」、「陶冶」、「洗練」、「教養」、「育成」など文脈によって様々な訳語が当てはめられる。
- v 18 世紀以降、ドイツにおいて「文化」と「文明」の概念が対置させられていることを論じるものとして次の文献を参照のこと。N.Eilas, *Über den prozess der Zivilisation, Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. 2 Bände. Francke Verlag, Bern und München 1969. (邦訳：N.エリアス『文明化の過程』、赤井慧爾、中村元保、吉田正勝訳、法政大学出版局、1977 年)
- vi カントは『論理学』においても「人間性 (Humanität) の成立」を「学問と趣味との合一を促進し、粗野さをそぎ落として、コミュニケーション能力と都会風の優雅さ」(IX 45) に求めている。
- vii 「人間性 (Menschheit)」は「動物性 (Tierheit)」と対概念である。
- viii ドイツ語で「共通感覚」は、ラテン語の *sensus communis* の訳として、*gemeiner Sin*, *Menschensinn*, *gemeiner (Menschen-) Verstand*, *gesunder Verstand* など様々な訳語で表現される。「共通感覚」は、アリストテレス以来の伝統的な意味があるが、カントにおいては、イギリス哲学の *moral sense* の影響を直接的には受けている。とはいえ、カントは美的判断の根拠としての「共通感覚」は、「常識」と呼ばれる「普通の悟性 (der gemeine Verstand)」とは本質的に異なるものとして区別している (V 238)。カントによれば、「普通の悟性」というのは、まだ「開化されていない悟性」を意味するのである。
- ix カントの「共通感覚」には「共同体の感覚」も読み込まれているが、この点についての考察は、牧野英二『カントを読む』、岩波書店、2003 年を参照のこと。
- x J.Schwartländer, *Der Mensch ist Person. Kants Lehre vom Menschen*, Stuttgart, 1968.
邦訳：J.シュヴァルトレンダー『カントの人間論』、佐竹昭臣訳、成文堂、1986 年、p.86
- xi 甲田純生『美と崇高の彼方へ』、晃洋書房、1999 年、p.79
- xii シュヴァルトレンダー、前掲書、p.88
- xiii この 83 節はカントの自然目的論から道徳目的論へ方向付けだが、この点の考察については、望月俊孝「カントの目的論」(所収：日本カント研究 3『カントの目的論』、日本カント協会編、理想社、2002 年)を参照のこと。
- xiv 紙幅の関係上、詳細には論じられないが、カントは「非社会的社交性」を個々の人間の間だけに見るのではなく、諸国家との関係においても見いだす。世界は戦争や荒廃、国家の転覆などを経て、野蛮人の無法状態から抜け出して、国際同盟を結ぶ国際連盟へ至るのである (VIII 24)。
- xv 佐藤全弘『カント歴史哲学の研究』、晃洋書房、1990 年、p.168
- xvi 中村博雄、前掲書。